児童の運動能力と心理的特性に関する研究

戸 村 博 之 (葛南工業高等学校)

(昭和52年12月12日 受付)

A Study of the Relationship Between Motor Ability and Mental Characteristics of Children

Hiroyuki TOMURA*

Abstract

With 637 primary school children of the second, fourth and sixth grades (including 317 boys and 320 girls), the motor ability test and three mental tests (the sociometric test, the Y-G personality test and the adjustment test) were administered and the relationship between motor ability and mental characteristics (social status, personality and adjustment) was analysed.

The results are as follows :

1. The children who were superior in motor ability were more popular and were liked better than those who were inferior in this ability among the same grade groups: the children who were popular in the group were superior in motor ability to those who were disliked and isolated. Such a tendency was more pronounced in boys than in girls, and in lower grades than in higher ones.

2. In the relationship between motor ability and personality, there was a little difference between sexes and grades. But it was proved that the group who were superior in motor ability were more stable emotionally, more lively in action and had greater social leadership than the group rated inferior in motor ability.

3. In motor ability and adjustment, there were some differences between boys and girls. The boys who were superior in motor ability showed better adjustment to themselves and society than the boys rated inferior in motor ability. However, in the case of girls, the tendency was not so pronounced as observed in the boys. (Hiroyuki Tomura : A Study of the Relationship Between Motor Ability and Mental Characteristics of Children *Jap. J. Phys. Educ.*, Vol. 23, No. 2, Sept., 1978, pp. 173~181)

緒 論

運動能力の発達が社会性の発達や情緒の発達にどのような影響を及ぼしているのかを知ること
は、体育のより効果的な指導をすすめていくうえ

で極めて重要なことである。従来この種の問題
は、運動能力テストの得点と sociometric test
および性格検査などの得点との相関を求めるとい
うかたちで数多くの研究¹⁾²⁾⁵⁾¹¹⁾が行なわれてき
た。しかしながら、これらの研究の多くは高校

* Katsunan Technical High School, Hirata, Ichikawa, Chiba (272)

生、大学生、特にスポーツ選手を対象としたものであり、子どもを対象とした研究は比較的少ない⁷⁾。

児童の身体・運動能力と社会的地位の関係について調査した H. H. Clarke ら⁸⁾⁹⁾は、背が高く、運動能力の優れた者に仲間の人気があつまり、集団の中で高い地位が与えられていると報告している。また、L. N. McGraw ら⁸⁾は、走・跳・投など一般的運動能力の優れた者に高い地位を与えられる傾向が認められ、特に競技参加の経験との相関があることを明らかにしている。さらに、友人関係の分化とその発達の傾向について調べた石黒⁶⁾の研究では、遊び仲間としては類似しているものの、親和感によるものおよび身体運動能力の優秀なものを友人として求めるという結果が見出されている。

一方、運動能力と性格との関係について検討した G. L. Raricke ら¹⁵⁾は、運動能力の優れた児童は劣った児童よりも社会的な適応がよく、また、性格的には活動的で、おだやかで、機知に富み、注意深く、協力的であると報告している。さらに、性格をとりあげた松田¹⁰⁾、直塚¹³⁾および K. Tillman ら¹⁸⁾の研究でも、Rarick らの研究とほぼ一致する結果を得ている。

このように、小学生、中学生を対象とした従来の研究報告は、運動能力の優れた者が劣った者よりも集団の中で高い社会的地位を与えられており、性格面でも好ましい傾向が認められることを示唆している。しかし、これらの研究の多くは男子を対象としたものであり、女子については、まだ十分に明らかにされていない。また、運動能力と社会的地位および性格との関係は年齢が高くなるにつれてどのように変化するのか、について考察した研究は極めて数が少ない。さらに、適応性に関しての問題は、上述の社会的地位や性格の研究の中で多少言及されているものの、まだ十分に解明されていない領域である。

本研究では、上記の問題点を考慮しながら、児童の運動能力と心理的特性（社会的地位、性格、適応性）との関係について、以下の観点から検討することをめざした。

1) 運動能力の優れた者と劣った者の社会的地

位には、どのような違いがみられるか。また、学級で人気をあつめている者と孤立したり、排斥されている者の運動能力に差がみられるか。

2) 運動能力の優れた者と劣った者の性格特性には、どのような違いがみられるか。また、性格（類型）によって運動能力に差がみられるか。

3) 運動能力の優れた者と劣った者の適応のしかたには、どのような違いがみられるか。また、適応の良い者と悪い者の運動能力に差がみられるか。

方 法

1. 調査期間

1976年6月～7月

2. 対象

八千代市立八千代台東小学校児童 2年 172名（男86, 女86）、4年 233名（男121, 女112）、6年 232名（男110, 女122）、計637名。

3. 測定種目および結果の処理

1) 運動能力テスト

運動能力テストとして、2年では①25 m走、②立ち幅とび、③ソフトボール投げ、④体支持持続時間、⑤連続とび越しの5種目をとりあげた。また、4年と6年では以下の13種目をとりあげた。①50 m走、②走り幅とび、③ソフトボール投げ、④斜め懸垂腕屈伸、⑤ジグザグドリブル、⑥連続さかあがり、⑦反復横とび、⑧垂直とび、⑨背筋力、⑩握力、⑪伏臥上体そらし、⑫立位体前屈、⑬踏み台昇降運動（6年男子のみ）

テストは「小学校1・2年生の運動能力テストと判定基準⁹⁾」および「スポーツテスト実施要覧¹⁴⁾」に従って実施した。テストの結果は、各学年とも男女別、種目別に平均と標準偏差を算出し、それを用いて個人の成績をすべてT得点に換算した。群構成は各種目T得点の総合点の高い方から25%、低い方から25%を抽出し、それぞれを上位群、下位群とした。

2) sociometric test

この調査は記名方式で、あそびの場面の選択基準を用いた。それぞれの質問に対し男子は男子、女子は女子の友人名を同じ組の中から3名列挙させる制限選択法とし、列挙した各々についてその

理由を書かせた。また、実施に先だち、この調査は組の人たちが楽しくなるようにするために行なうこと、思ったとおり正直に書くこと、相談したり見せ合ったりしないことなどを注意した。さらに、低学年については、特に時間をかけるよう配慮した。

調査票の主要部分は次のとおりである。

①がっこうで、やすみじかんなどに、じゆうにはなしあったり、あそんだりするとき、このくみのなかのだれといっしょになりたいとおもいますか。そのひとのみょうじとなまえを、いっしょになりたいじゅんばんに3人かいてください。

②がっこうで、やすみじかんなどに、じゆうにはなしあったり、あそんだりするとき、このくみのなかで、いっしょになりたくないとおもうひとがいますか。もしいたら、そのひとのみょうじとなまえを、いっしょになりたくないじゅんばんに3人かいてください。

調査結果の整理は、各学年ともソシオマトリックスを男女別、学級別に作成し、個人の特性に関する指数、すなわち、選択地位(choice status)、排斥地位(rejection status)、および社会的地位指数(social status index)を次の式を用いて算出した¹⁶⁾。

$$\textcircled{1} \quad CS = \sum Cr / N - 1$$

$$\textcircled{2} \quad RS = \sum Rr / N - 1$$

$$\textcircled{3} \quad SSI = (\sum Cr + \sum Rr) / N - 1$$

Cr：受けた選択数

Rr：受けた排斥数

次に本研究では、一応便宜的ではあるが、下記のような規準をもって人気児童、排斥児童および孤立児童の抽出を行なった。

① 人気児童

4年男子および4年女子ではCS.30以上、そ

他の学年ではCS.25以上をもってその学級の人気児童とした。この規準の設定については、資料を通覧した場合、CSの分布状況からして大体指数.25および.30の辺でそれぞれ段階区分がついたからである。排斥児童および孤立児童でもそれぞれの決定規準で同様なことがいえる。

② 排斥児童

2年男子ではRS.30以上、その他の学年ではRS.25以上をもってその学級の排斥されている児童とした。なお、該当する児童がいなかった学級(4年男子1学級、4年女子1学級、6年女子1学級)からは抽出しなかった。

③ 孤立児童

積極的選択においても、拒否的選択においても共にあまり級友から指名されない児童として、操作的にはSSI.10以下の者をその学級の孤立児童とした。なお、該当する児童がいなかった4年女子の1学級からは抽出しなかった。

男女別、学年別の抽出人数は表1に示す通りである。

3) 性格検査

性格特性の測定には、矢田部・ギルフォード性格検査—学童用¹⁷⁾—(以下Y-G検査と略記する)を用い、検査は同検査実施手引に従って実施した。性格の分類は、各個人の尺度点をプロフィール化し、A、B、C、D、E型の5類型に分類した。なお、性格類型の分類にあたっては、比較的顕著なタイプの者を抽出するため、得点プロフィールが典型または準型を示したものをとりあげ、混合型および判定不能などは分類の対象から除いた。

4) 適応性診断テスト

適応性の診断には、長島貞夫らの「適応性診断テスト」¹²⁾を用いた。このテストは、児童が当面

表1 人気児童、排斥児童および孤立児童の抽出人数

男				女			
学年(学級数)	人気児童	排斥児童	孤立児童	学年(学級数)	人気児童	排斥児童	孤立児童
2年 (5)	12	14	12	2年 (5)	14	11	9
4年 (6)	12	9	10	4年 (6)	10	11	9
6年 (6)	15	11	12	6年 (6)	9	10	15

している環境条件や日常の問題場面において、どのように適応しているか、さらに、正常にして幸福なかつ社会的に有用なパーソナリティを発展せしめつつあるかどうかを検査するために作成され、標準化されたものである。テストの構造は、①異常傾向、②神経質傾向、③自尊感情、④退避的傾向、⑤自己統制、⑥社会的技術、⑦統率性、⑧家庭関係、⑨学校関係、⑩近隣関係の10個の特性から成り、各特性は15の質問項目から構成されている。

このテストは、6年の児童を対象とし、テストの実施と結果の処理については、同テスト解説に従った。また各個人の総点を算出し、男女別に高い方から25%、低い方から25%を抽出して、それぞれを適応群、不適応群とした。

結 果

1. 運動能力と社会的地位の関係

表2 運動能力上位群と下位群のCS, RSおよびSSIの高い者と低い者の人数(男子)

		2 年		4 年		6 年	
		上 位 (22人)	下 位 (22人)	上 位 (30人)	下 位 (30人)	上 位 (28人)	下 位 (28人)
CS	高	18	3	18	11	18	10
	低	4	19	12	19	10	18
RS	高	12	10	15	15	14	13
	低	10	12	15	15	14	15
SSI	高	13	9	21	9	17	11
	低	9	13	9	21	11	17

表3 運動能力上位群と下位群のCS, RSおよびSSIの高い者と低い者の人数(女子)

		2 年		4 年		6 年	
		上 位 (22人)	下 位 (22人)	上 位 (28人)	下 位 (28人)	上 位 (31人)	下 位 (31人)
CS	高	14	8	19	9	17	14
	低	8	14	9	19	14	17
RS	高	8	14	7	19	16	14
	低	14	8	21	9	15	17
SSI	高	11	11	15	13	16	15
	低	11	11	13	15	15	16

表2および表3は、男女別、学年別に運動能力上位群と下位群のCS, RSおよびSSIの高い者と低い者の人数を示したものである。男女別、学年別にそれぞれ人数での群差をみたところ、男子では2年のCS ($\chi^2 = 20.497$, $df = 1$, $P < 0.01$), 4年のSSI ($\chi^2 = 9.600$, $df = 1$, $P < 0.01$) および6年のCS ($\chi^2 = 4.571$, $df = 1$, $P < 0.05$) で有意差が認められた。つまり、2年と6年では、上位群が下位群よりもCSの高い者が多く、4年では、上位群が下位群よりもSSIの高い者が多かった。また、4年の上位群は下位群よりもCSの高い者が多い傾向がみられた ($\chi^2 = 3.270$, $df = 1$, $P < 0.10$)。一方、女子では4年のCS ($\chi^2 = 7.143$, $df = 1$, $P < 0.01$) とRS ($\chi^2 = 10.338$, $df = 1$, $P < 0.01$) で有意差が認められた。すなわち、上位群は下位群よりもCSの高い者が多く、RSの低い者が多かった。また、2年では、上位群が下位群よりもCSの高い者が多く、RSの低い者が多い傾向がみられた (いずれも $\chi^2 = 3.273$, $df = 1$, $P < 0.10$)。

次に人気児童と排斥児童および孤立児童との運動能力を比較してみた。表4と5に示されているように、男子、女子ともに、2年と4年の人気児童は排斥児童および孤立児童よりも運動能力で優れている傾向がみられるが、6年では群間に差がみられない。平均値の差の有意性を検定した結果、男子では2年の人気児童と排斥児童間 ($t = 2.20$, $df = 24$, $P < 0.05$), 人気児童と孤立児童間 ($t = 3.12$, $df = 22$, $P < 0.01$) および4年の人気児童と排斥児童間 ($t = 2.92$, $df = 19$, $P < 0.01$), 人気児童と孤立児童間 ($t = 3.11$, $df = 20$, $P < 0.01$) でそれぞれ有意差が認められた。女子では4年の人気児童と排斥児童間 ($t = 2.24$, $df = 19$, $P < 0.05$) で有意差が認められた。

2. 運動能力と性格の関係

図1は男女別、学年別に運動能力上位群と下位群のY-G検査プロフィールを比較したものである。図から明らかなように、男子、女子ともに平均プロフィールはほとんどがA(平凡)型であるが、上位群は下位群と比較するとやや右下がり(安定積極)傾向を示しており、下位群は上位群と比較するとわずかながら左下がり(不安定

表 4 人気児童と排斥児童および孤立児童との運動能力の比較 (男子)

		2 年			4 年			6 年		
		人気児童 N=12	排斥児童 N=14	孤立児童 N=12	人気児童 N=12	排斥児童 N=9	孤立児童 N=10	人気児童 N=15	排斥児童 N=11	孤立児童 N=12
運 動 能 力	M (S D)	53.96 (6.53)	47.48 (7.77)	46.32 (4.83)	54.07 (4.78)	43.64 (10.39)	47.51 (4.59)	50.82 (6.47)	49.48 (5.52)	48.45 (6.46)

表 5 人気児童と排斥児童および孤立児童との運動能力の比較 (女子)

		2 年			4 年			6 年		
		人気児童 N=14	排斥児童 N=11	孤立児童 N=9	人気児童 N=10	排斥児童 N=11	孤立児童 N=9	人気児童 N=9	排斥児童 N=10	孤立児童 N=15
運 動 能 力	M (S D)	52.89 (6.92)	50.28 (5.27)	47.99 (7.77)	53.06 (7.14)	45.05 (8.32)	48.73 (4.36)	51.52 (5.86)	49.76 (7.04)	49.12 (6.29)

2 年男子

2 年女子

4 年男子

4 年女子

6 年男子

6 年女子

○—○上位群 ●—●下位群 ** P < .01 * P < .05

図 1 運動能力上位群と下位群の Y-G プロフィールの比較

消極)傾向を示している。男女別, 学年別にそれぞれ尺度ごとに両群の平均の差の有意性を検定した結果, 2年男子ではC, Aの2つの尺度で有意差が認められた。すなわち, 上位群は下位群よりも気分の変化が少なく, 指導性があるなどの特徴がみられる。4年男子ではD, C, I, Aの4つの尺度で有意差が認められた。つまり, 上位群は下位群よりも抑うつ性, 気分の変化, 劣等感が少なく, 指導性があるなどの面をもっている。6年男子ではI, O, Aの3つの尺度で有意差が認められた。すなわち, 上位群は下位群よりも劣等感が少なく, 客観的で社会的指導性があるなどの面をもっている。男子全体について尺度別にみると, Aの尺度はどの学年でも, Cの尺度は2年と4年, Iの尺度は4年と6年で有意差が認められた。

2年女子では, Ag, Tの2つの尺度を除く他のすべての尺度で有意差が認められた。すなわち, 上位群は下位群よりも情緒的に安定しており, 社会的適応もよく, 動作は活発で, 指導性があるなどの面をもっている。4年女子ではCo, G, Sの3つの尺度で有意差が認められた。つまり, 上位群は下位群よりも協調性があり, 動作は活発, 社会的外向であるなどの面をもっている。6年女子では, D, I, N, O, G, A, Sなど7つの尺度で有意差が認められた。すなわち, 上位群は下

位群よりも抑うつ性, 劣等感, 神経質傾向が少なく, 客観的で, 動作は活発, 指導性を持ち, 社会的外向であるなどの面をもっている。女子全体について尺度別にみると, G, Sの2つの尺度はどの学年でも有意差が認められ, D, I, N, O, Aの5つの尺度は2年と6年で有意差が認められた。

表 6 性格類型による運動能力の比較 (男子)

		A型	B型	C型	D型	E型
2年	Mdn	47.72	49.85	50.74	53.84	45.67
	N	18	5	9	6	6
4年	Mdn	52.27	48.06	50.12	55.05	45.11
	N	26	8	24	5	6
6年	Mdn	53.37	48.64	50.22	52.16	45.46
	N	19	6	21	7	6

表 7 性格類型による運動能力の比較 (女子)

		A型	B型	C型	D型	E型
2年	Mdn	49.85	44.06	51.01	55.98	47.72
	N	17	4	19	5	6
4年	Mdn	52.34	51.46	50.68	48.35	47.89
	N	10	6	26	6	9
6年	Mdn	52.15	46.03	48.54	54.93	50.49
	N	16	6	12	10	20

表 8 適応性診断テストによる運動能力上位群と下位群の比較 (男子)

特 性	運動能力上位群 (N=28)		運動能力下位群 (N=28)		上位群と下位群の比較 (t)
	M	S D	M	S D	
1. 異 常 傾 向	11.89	2.36	10.00	2.65	2.78**
2. 神 経 質 傾 向	10.35	3.02	9.67	2.69	0.89
3. 自 尊 感 情	9.46	3.14	7.14	3.39	2.60*
4. 退 避 的 傾 向	10.71	2.71	8.32	2.78	3.22**
5. 自 己 統 制	9.67	2.80	8.28	2.56	1.90
6. 社 会 的 技 術	9.03	3.15	7.17	3.23	2.14*
7. 統 率 性	8.32	3.66	5.14	2.86	3.57**
8. 家 庭 関 係	10.60	3.38	9.78	3.17	0.92
9. 学 校 関 係	9.85	2.74	7.82	3.36	2.44*
10. 近 隣 関 係	11.25	2.87	10.00	3.60	2.44*
適 応 性 (総 点)	100.68	19.43	83.14	18.23	3.17**

** P<.01 * P<.05

表9 適応性診断テストによる運動能力上位群と下位群の比較（女子）

特 性	運動能力上位群 (N=31)		運動能力下位群 (N=31)		上位群と下位群の比較 (t)
	M	S D	M	S D	
1. 異 常 傾 向	11.16	2.10	9.97	2.30	2.09*
2. 神 経 質 傾 向	10.55	2.64	10.23	2.38	0.70
3. 自 尊 感 情	9.52	2.89	8.26	2.71	1.75
4. 退 避 的 傾 向	9.32	3.05	9.81	2.71	0.66
5. 自 己 統 制	10.39	2.82	9.74	2.29	0.98
6. 社 会 的 技 術	9.97	3.52	8.87	2.38	1.42
7. 統 率 制	8.68	3.23	6.10	2.98	3.23**
8. 家 庭 関 係	10.77	3.47	10.39	3.41	0.43
9. 学 校 関 係	10.03	3.32	10.03	2.96	0.00
10. 近 隣 関 係	11.23	2.63	10.81	2.14	0.68
適 応 性 (総 点)	101.65	19.72	92.74	16.04	1.92

**P<.01 *P<.05

次に性格類型から運動能力をみてみた。表6は男子、表7は女子の性格5類型の運動能力を比較したものである。全体的にはD（安定積極）型の成績が良く、B（不安定積極）型、E（不安定消極）型の成績が悪い傾向がみられる。男女別、学年別にRyanの法を用いて各群の中央値の対比較を試みた結果、2年男子のD型とE型の間でのみ5%水準で有意差が認められた ($\chi^2 = 12.00$, df = 1)。

3. 運動能力と適応性の関係

表8は男子、表9は女子の適応性診断テストの10個の特性と総点について、運動能力上位群と下位群の平均値を求め、両群の差の有意性の検定を行なった結果を示したものである。男子では神経質傾向、自己統制および家庭関係を除く異常傾向、自尊感情など7つの特性と総点で有意差が認められた。つまり、上位群は下位群よりも自己に対する適応と社会に対する適応が良好であり、心理的にも調和した状態にあることを示している。他方、女子では異常傾向と統率性に有意差が認められた。すなわち、上位群は下位群よりも情緒的に安定しており、積極的な行動ができる状態にあることを示している。

次に適応群と不適応群の運動能力を比較してみた。表10および表11で明らかなように、男子、女子ともに適応群が不適応群よりも運動能力で優れている。

表10 適応群と不適応群の運動能力の比較（男子）

		適応群 N=28	不適応群 N=28	適応群と不適応群 の比較 (t)
運動能力	M	51.08	46.52	2.73**
テスト	S D	6.32	5.98	

**P<.01

表11 適応群と不適応群の運動能力の比較（女子）

		適応群 N=31	不適応群 N=31	適応群と不適応群 の比較 (t)
運動能力	M	52.24	48.44	2.52*
テスト	S D	5.82	5.86	

*P<.05

考 察

本研究では、児童の運動能力と心理的特性（社会的地位、性格および適応性）との関係について検討することをめざした。

運動能力と社会的地位との関係は、男子では児童期前期から後期にかけて、運動能力の優れた児童が劣った児童よりも学級集団の中で好まれ、人気を集めており、また、学級の人気児童は、排斥児童および孤立児童よりも運動能力で優れていた。さらに、これらの傾向は高学年よりも低学年で顕著であった。他方、女子では、児童期前期と中期で男子とほぼ同様な傾向が認められたが、児

童期後期では、これらの傾向がみられなかった。

小学生男子を対象とした Clarke ら⁸⁾⁴⁾および中学生を対象とした McGraw ら⁹⁾は、運動能力で優れていることが、集団の中で高い社会的地位を与えられる重要な条件になると報告している。また、石黒⁶⁾は、児童の遊び仲間として選ぶ理由の1つとして、身体運動能力の優秀なことをあげる者が比較的多いこと、さらに、年齢が進むにつれて、まじめ、熱心、責任感が強いなどの人格的要因をあげる者が多くなることを指摘している。児童にとって運動能力で優れていることは、学級集団の中で仲間の人気を集め、承認されるための重要な条件になるが、逆に、運動能力で劣っていることは、遊びなどの場面で仲間とうまく交流できなかったり、排斥されたり、孤立したりする要因の1つになると言えよう。また、このような傾向は高学年よりも低学年で、女子よりも男子において顕著であると思われる。特に女子の場合、児童期後期においては、運動能力の優劣が学級内の交友関係に、男子ほど影響を及ぼさないとの結果が得られたが、この理由としては、運動能力のもつ生理学的、心理学的意味が男子と女子とでは違っていること、および、女子に従順さを求める社会的、文化的背景などが考えられる¹⁹⁾。

運動能力と性格との関係は、松田ら¹⁰⁾および直塚ら¹⁸⁾の知見とはほぼ一致する結果であった。すなわち、男子と女子および学年によって多少の違いはあるが、運動能力の優れた児童は劣った児童よりも劣等感、気分の変化が少ないなど情緒的に安定しており、社会的な接触を好み、指導性があるなどの傾向がみられた。また、プロフィールは、どの学年も運動能力の優れた群がやや右下がり傾向(安定積極型)を示し、劣った群はわずかに左下がり傾向を示した。これらの結果は、運動能力が優れているということと、児童の情緒安定性、社会的適応、活動性などが関連をもつことを示唆している。また、性格特性中A(支配性)の尺度が4年女子を除く他のすべての学年で、G(活動性)およびS(社会的外向)の尺度が女子のすべての学年で有意差が認められたのは注目される。一方、性格類型からみた運動能力は、全体的にD(安定積極)型の成績が良く、B(不安定積極)

型、E(不安定消極)型の成績の悪い傾向がみられた。これは、性格類型と運動能力との間に、一定の関連があることを示唆していると思われる。

運動能力と適応性との関係は、男子では、運動能力の優れた児童が劣った児童よりも、自己に対する適応と社会に対する適応が良好であった。しかし、女子では男子ほど顕著な差が認められなかった。また、男子および女子の適応群は不適応群よりも運動能力で優れていた。この結果は、運動能力の優劣が児童の適応のしかたと関連することを示しており、特に男子の場合、運動能力の優れた児童は劣っている児童よりも自己の基本的要求が適度に充たされて、安定感を有し、また、自己主張と社会的要求との調和が維持されていることを示唆している。

以上から、児童の運動能力の優劣は、交友関係、性格および適応のしかたなどと密接な関連のあることが考えられる。今後は、これらの要因の相互作用を分析するとともに、これらの因果関係についても検討を加えていく必要がある。

要 約

本研究では小学校2年、4年、6年の児童637名(男子317名、女子320名)を対象に運動能力テストと3つの心理検査(Y-G検査, sociometric test, 適応性診断テスト)を実施し、運動能力と心理的特性(社会的地位、性格、適応性)との関係について考察した。その結果は次のように要約される。

1) 運動能力の優れた児童は劣った児童よりも学級集団の中で人気をあつめ、承認されており、また、学級集団の中で人気をあつめている児童は、嫌われたり孤立している児童よりも運動能力で優れていた。さらに、これらの傾向は女子よりも男子で、高学年よりも低学年で顕著であった。

2) 運動能力と性格との関係については若干の男女差、学年差が認められたが、運動能力の優れた児童は劣った児童よりも情緒面で安定しており動作も活発で、指導性があるなどの傾向が認められた。また、性格類型からみた運動能力は、全体的にD(安定積極)型の成績が良く、B(不安定積極)型およびE(不安定消極)型の成績が悪い

傾向がみられた。

3) 運動能力と適応性との関係については、男子において、運動能力の優れた児童が劣った児童よりも自己に対する適応と社会に対する適応が良好であった。しかし、女子では男子ほどに顕著な差がみられなかった。

本研究の実施に当っては、八千代市立八千代台東小学校の坂本宗三郎校長をはじめ諸先生方に、多大の御協力をいただきました。深く感謝致します。

文 献

- 1) Biddulph, L. G., "Athletic achievement and the personal and social adjustment of high school boys", Res. Quart. 25: 1~7, 1954.
- 2) Booth, E.G., "Personality trait of athletes as measured by MMPI," Res. Quart., 29: 127~37, 1958.
- 3) Clarke, H.H. and D.H. Clarke, "Social status and mental health of boys as related to their maturity, structural and strength characteristics," Res. Quart., 32: 326~34, 1961.
- 4) Clarke, H.H. and W.H. Greene, "Relationships between personal-social measures applied to 10-year-old boys," Res. Quart., 34: 288~98, 1963.
- 5) Fulton, R.E. and E.M. Prange, "Motor learning of highly chosen and unchosen teammates," Res. Quart., 21: 126~31, 1950.
- 6) 石黒彰二「友人関係の発達—生活場面によるその変動—」児童心理, 5: 64~73, 1951.
- 7) 清原健司, 上田雅夫「体育・スポーツ心理学の諸問題」心理学研究, 35: 143~53, 1964.
- 8) MacGraw, L.N. and J.W. Tolbert, "Sociometric status and athletic ability of junior high school boys," Res. Quart., 24: 72~80, 1953.
- 9) 松田岩男, 小学校1・2年生の運動能力テストとその判定基準, 光文書院, 1967.
- 10) 松田岩男, 杉原 隆, 海野 孝「児童の体格・運動能力・性格の関係について—発育追跡研究の資料分析一」日本体育協会スポーツ科学研究報告, No. XIII, 1969.
- 11) Merriman, J. B., "Relationship of personality traits to motor ability," Res. Quart., 31: 163~73, 1960.
- 12) 長島貞夫, 山崎 正, 藤原喜悦, 新訂適応性診断テスト解説, 金子書房, 1975.
- 13) 直塚鉄太郎, 新里紹正, 日高良広「小学校期の主として体型・性格よりみたる運動能力の特性について(3報)」体育学研究, 15: 62, 1971.
- 14) 日本体育協会, スポーツテスト実施要覧, 日本体育協会, 1967.
- 15) Rarick, G.L. and R. McKee, A study of twenty third-grade children exhibiting extreme levels of achievement on tests of motor proficiency, Res. Quart., 20: 142~52, 1949.
- 16) 高木貞二, 心理学研究法, 岩波書店, 1969. pp. 365~75.
- 17) 辻岡美延, 新性格検査法—Y-G性格検査実施応用研究手引一, 竹井機器工業, 1974.
- 18) Tillman, K., "Relationship between physical fitness and selected personality traits," Res. Quart., 36: 483~89, 1965.
- 19) 津留 宏, 性差心理学, 朝倉書店, 1970.